

日本記録ホルダー新島 襄～日本人第1号×3～

講演	本井 康博【もとい・やすひろ】
講師紹介	元同志社大学神学部教授 同志社教会責任役員

日本人第1号

新島襄は、日本人で初めてという記録をいくつも持っています。同志社ギネスがあれば、確実に登録されるレベルです。一つ、二つは想像がつくかもしれませんが、全問正解は学内でちょっと難しそうですね。で、今日はアメリカ留学中に達成した次の3つを中心に紹介してみます。

- ・初の自由人
- ・初の学士
- ・初の按手礼

日本人としては、これだけでも他に例のないタイトルホルダーです。大事なことは、これらがいずれも同志社の校風に密接に関係していることです。

今日は「同志社スピリット・ウィーク」中の講演ですから、「同志社スピリット」（同志社精神、同志社の校風）の中身はいったい何か、歴史的にどんなルーツを有しているのか、といった点を解明するために、これらの日本記録を取り上げます。

自由人第1号

この証拠は木村毅（き）『早稲田外史』（講談社 1964年 233頁）にあります。早稲田出身の歴史家が、大隈重信や福沢諭吉を差し置いて、新島襄を指名されていることに、まずびっくりです。とりわけ、福沢は早くから「独立自尊」を唱えていただけに、世間的には福沢が第1号と思われると思います。

ですが、木村氏は新島を日本人「初の自由独立人」だと見ます。岩倉使節団に対する留学中（1872年）の彼のある対応を見て、「果然（かぜん）、彼は日本最初の自由独立人となっていたのだ」と評します。この評価は、安部磯雄を筆頭とする彼の教え子たち5人が新島の死後、東京専門学校（早稲田大学）で早稲田の基盤造りに貢献したことと合わせて見ると、さらに納得できるはずです。同書では、安部たちの働きが早稲田への「同志社学風の輸血」になったと感謝されています。

「輸血」以前の早稲田の校風は、明らかに帝大（東京大学）モドキでした。なぜなら、政治上の理由などから、創立者として前面に出ることを控えていた大隈は、小野梓（あずさ）と彼の仲間に創立事業を委ねました。世にいう「鵜渡（おうと）会」の人たちで、いずれも帝大の学生か卒業生でした。欧米の大学に留学した人もいません。

だから、早稲田のモデルは帝大以外には考えられません。名目は私立とは言え、性格から言えば、いわば「帝大分校」みたいなものでした。

その後、同志社からの移籍組が自由な同志社の校風を「移植」します。そのためにしだいに帝大風の校風が刷新され始め、早稲田は「私学の雄」への道を歩き始めるというわけです。早稲田を実質的に私学に変身させるのに多大の貢献を果たした同志社の5人組は、すべて新島襄の教え子たちです。しかも信徒でした。

さらに5人中、4人までもがアメリカ留学の経験者でした。すなわち、同志社時代の恩師・新島襄のDNAをしっかりと受け継いだ門弟でした。

自由人・新島襄

DNAから見て、自由と新島とは切り離せません。両者は一心同体、いうならば新島は「自由命（いのち）」でした。私は木村氏の卓見を「バクる」かたちで、「新島襄を語る」シリーズの一冊の書名を『元祖リベラリスト』にしました。

さらに、同志社大学が刊行した『マンガで読む新島襄』（同志社大学 2008年）を監修した際、前編（出生から留学まで）の副題を「自由への旅立ち」といたしました。「殿の奴隷」を強いられた幕末の不自由な封建社会から不法に飛び出して、つまり函館から密出国までして欧米に行きたかったのは、ひとえに自由への憧れからでした。

念願がなって1年後、貿易船をヒッチハイクしてボストンに到着し、ニューイングランドで8年間も留学生活を享受できました。当時のアメリカでもこの地域はもともと自由な雰囲気が濃厚でした。ホスト・ファミリー（ハーディー家）にも恵まれて、ここで彼は自由人に成長いたします。3つのキリスト教主義学校で「自由教育」（リベラルアーツ教育）を受けたことが、幸いしました。

密出国から10年後、新島は自由人として横浜に帰ってきます。そして京都を拠点に活動しますが、その間の指針は、“Freedom is my living motto.”です（本井康博著『元祖リベラリスト—新島襄を語る（五）—』 思文閣出版 2008年 84頁）。

「自由こそが生けるモットー」というわけです。まさに「自由命（いのち）」です。

したがって彼が起した同志社は、自由人養成校に他（ほか）なりません。新島はわが身を顧みて、同様の自由人をこの学校で再生産して、世に輩出したかったのです。新島が同志社を設立した目標のひとつは、自分がアメリカで受けたリベラルアーツ教育、つまりリベラルな人格形成や人間造りをして自由人を生み出すことでした。

彼が自由を大事にするようになった背景について、同僚宣教師のJ・D・デイヴィスはこう証言しています。「新島は米国に滞在中に自由の価値について非常に深い感銘を受けた人であった。日本には自由が必要である〔中略〕と彼は感じていた」（J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳『新島襄の生涯』 同志社大学出版部 1992年 125頁。〔 〕は本井、以下同）。

学士第一号

2番目の日本記録に移ります。新島は1870年にアーモスト大学を正規に卒業し、「理学士」（Bachelor of Science）という称号というか、学士号を貰います。日本人が受理した最初の学士です。

日本では学士号を出す大学が、どこにもなかった時代です。それまで欧米の大学に留学した日本人はいるにはいたのですが、卒業にまで至った学生は皆無でした。

今は学士と言っても、さほどありがたいものではなくなりました。大学を出れば学士号がもらえますが、最近は短期大学の修了生も学士号がもらえるようになりました。

しかし、それを目当てに入学する高校生や浪人生は、まずいないでしょう。現在はほとんどの高校生が短大か大学に行く時代です。特に京都は進学率が全国で一番高く、今年も60%を超えました。

けれども戦前、とりわけ19世紀は事情がまったく違います。学士の数はおそらく今の博士よりも少数でしたから、社会的にとても珍重されました。その典型が学士会という組織です。

学士会

学士会はエリートや「勝ち組」の集団（サークル）です。東京神田に学士会館という活動拠点を構えています。現在でも修士会や博士会すらないのに、学士会は頑張っています。

実は学士会館の玄関前には、東大発祥の地の碑と新島襄生誕記念碑が立っています。よくよく新島は学士（会館）と所縁（ゆかり）があるんですね。新島がここで生まれた頃は、上州安中藩の上（かみ）屋敷がありました。

彼は函館から海外へ脱出するまで、ここで21年間を過ごします。彼のアメリカ留学中に明治維新があって廃藩置県が起き、新政府はここに開成学校（東大の前身）を建てました。由来から言えば、ここに同志社が出来てもおかしくはなさそうですね。

1886年には今の学士会が組織されます。東京大学が帝国大学と改称された時でした。新島は日本人初の学士ですから、まさきに入会したかと言いますと、これが駄目なんです。入会できません。なぜなら入会資格は、帝大出身者限定ですから。

要するに当初は、東大の同窓会でした。その後、帝大は各地（一部は植民地にも）に建てられ、最終的には国内で七つに増えます。いわゆる「七帝大」です。これ以外の卒業生は、入会できません。帝大が制度として無くなった戦後、いや、現在もその繋がりは続いており、たとえば「国立七大学定期戦」といった形で生き残っています。それほど、旧帝大のパワーとブランド、威光は今でも凄いいというわけです。

私是一度、この学士会から呼ばれて、学士会館で講演をしたことがあります。ちょうどNHK大河ドラマ「八重の桜」の放映時（2013年）でしたから、新島八重の話しをしてほしいとのことでした。もちろん新島と学士（会館）のこともお話ししました。

100人以上の会員が参加されていたましたが、9割が東大卒、残りが北大や東北大などの卒業生でした。こんな「高学歴」集会は、私には初めての経験でした。会場にいた私立大学の卒業生は、私くらいだったでしょうね。

私立大学志向

さて、学士号をとったから新島は率先して大学を創った、かというところでもありません。留学中にアメリカに渡ってきた岩倉使節団の団員（有期）に現地であったことが大きかったと思います。その当時の新島は、大学院（神学校です）で牧師になる準備と勉強をしておりましたから、いずれ帰国すれば、各地を伝道して回って信徒や教会を生み出すことを第一の使命と考えていたはずです。

ところが、使節団に加わって欧米の代表的な学校（特に大学）やら各国の教育行政の視察をするのにおよそ1年を費やすと、帰国目的に大きな変化が生じました。欧米文明の土台には大学があることに気づかされました。

この結果、牧師になって日本に戻るという当初の計画だけではなく、教育者として学校（特に大学）設立にも力を注ぎたいとの願いが生まれました。要するに伝道（宗教）と学校（教育）を両立させるという「二刀流」です。

その場合の学校とは、もちろん私学です。ニューイングランドで学んだ3つの学校はいずれもキリスト教主義（プロテスタント系）の私学でした。宗教教育（精神教育）が行なえる私学の必要性を誰よりも痛感できました。

ここから彼の「私学人」への歩みが始まります。彼の後半生は、どこまでも私学らしい私学の創立を目指す私学人をあくまでも志向いたします。

実は留学中、使節団の関係者（とりわけ政府要人）から官学（今の国公立大学）や高級官僚（将来的には大臣）への誘いを何度も受けました。「就活」せずに高級官僚になれるオイシイ機会でした。新島は多少の迷いはあったものの、最終的にはこの輝かしいチャンスを自ら封印し、帰国後はひたすら私学創立の企てに邁進いたしました。

日本初の私立大学を目指す

彼のこの試みは、実は日本初の挑戦でもあります。これも新島の日本記録にしたいところですが、不成功に終わりましたから、入れるのはちょっと問題でしょうね。しかし、記録しておくだけの価値はあります。

そこで、先に紹介した『マンガで読む新島襄』で言えば、後編（帰国から永眠まで）の副題をつける時に、それを匂（にお）わすタイトルにしたいと思いました。そこで「日本初の私立大学設立への挑戦」といたしました。

日本の大学史では慶応義塾が私立大学第1号ということになっていますので、同志社は陰が薄いのですが、挑戦者としては新島こそ「日本初」なんです。着手に関しては明らかに新島の方が先です。新島（同志社）が先行し、福沢（慶應義塾）が後を追う、ただし成功したのは福沢です。

新島としては、募金運動で後から慶應に追いかけれ、最終的には先を越されました。福沢は新島に刺激を受けて、腰を挙げたのです。当時の新島は、新たな「吾人計画之邪魔」の出現に相当のショックを受けました。

新島自身も、大学を立上げる計画に関しては、「言い出したのは自分が日本で初めて」と証言しています。「福沢先生にしては遅すぎる」とちよっぴり揶揄（やゆ）しております（本井康博著『新島襄と徳富蘇峰―熊本バンド・福沢諭吉・中江兆民をめぐって―』 晃洋書房 2002年 188頁）。

按手礼第1号

次の日本記録は、日本人として初めて按手礼を受けたことです。按手礼というのは、キリスト教世界の業界用語で、正規の牧師（伝道者）になる時に受ける儀式のことです。先輩牧師（上司）たちが、牧師候補者の頭の上に「按手」（手を置くこと）して祈ります。

先輩牧師が大勢の場合は、候補者の周囲をぐるりと輪になって取り囲みます。それでも場所が足りない場合は、その外側に二重の輪を作ってとり囲みます。その場合、2列目の牧師は候補者の頭に手を置けませんから、前列目の牧師の肩や背中に手を置きます。いわば間接授按です。

そもそも神学校を卒業し、教会でインターンシップを終えた後、牧師試験に合格しただけでは、牧師とは認められません。按手礼という公開の席での儀式を経て、初めて牧師として公認されます。これで晴れて牧師を名乗り、洗礼を施すことが許されます。

ただし、教派によって按手礼の呼び名は違います。カトリックは叙階、正教会は叙聖（神品機密）、聖公会は聖職按手といった具合です。英語では共通してordination（牧師・聖職者就任式）と呼ぶようです。

新島はプロテスタントの按手礼を1874年にアメリカで受けました。日本には外国人宣教師（たいてい牧師です）はいても、日本人牧師がいまだゼロの時代です。新島が帰国してからのことですが、1877年に国内初の按手礼式が大阪で行なわれました。受按したのは、澤山保羅（ぼうろ）という青年で、梅花女学校（現梅花女子大・中高）や浪花教会の創立者として知られた人物です。

同じ教派に所属する伝道者ですから、新島はもちろん宣教師たちと一緒に澤山の頭に手を置き、按手礼を執行しました。新島にとっては、初めての「授按」です。

これ以降、新島は先輩、というより日本人牧師第1号として大勢の後輩に授按いたしますが、大半が同志社での教え子であることはもちろんです。例外は澤山を始め、成瀬仁蔵や松山高吉、松村介石など少数です。

日本人初の司祭は沢辺琢磨

按手に関して、ちょっと脇道に逸（そ）れます。他教派ではありますが、新島の周辺で早くにキリスト教の伝道師になった人がいます。

沢辺琢磨（たくま）（数馬（かずま））です。新島が日本を密出国する際に函館で世話になった青年です。当時は函館の神社（神明社）で宮司を務めておりました。新島が函館で入塾しようとした武田塾の塾頭、菅沼精一郎の紹介で知り合い、沢辺の斡旋で福士卯之吉（成豊）と知己になります。

上海へ行く貿易船、ベルリン号（W・T・セイヴォー船長）が函館港に停泊中、真夜中にこっそりと乗船できたのは、この福士の決死的な手引きのおかげでした。

というわけで、新島は密出国の際、沢辺を3大恩人のひとり（筆頭は福士でしょうね）に挙げています。「米利堅（メリケン）船二乗し箱橋港を出帆す。但（ただし）、沢辺数馬、富士屋宇之吉の同旋二依（より）而（て）此（こ）之（の）行を得たり。此二友骨二徹し忘るへからず。且（かつ）菅沼精一郎君も右様の友なり」（新島襄全集編集委員会編 『新島襄全集』5 同朋舎出版 1984年 38頁。以下㉔38）。

ところが、10年後に帰国してからは、沢辺や菅沼との交流はありません。

さすがに福士とは旧交を温（あた）めています。菅沼は消息不明ですからやむをえないとして、沢辺とは接触する機会があったはずですが。彼は新島出国の翌年（1865年）、神社の宮司としてニコライの殺害を決断し、彼に接触します。もちろん、ニコライが自宅を開放して新島の世話をしていたことは承知の上です。

しかし、ミイラ取りがミイラになりました。ニコライの説得に共鳴し、ハリストス正教の求道者になります。1868年には洗礼を受けたばかりか、翌年からは仙台を拠点に伝道に熱をあげます。その功績が認められ、1874年に布教会議で「伝教者」に認定されたばかりか、1875年には司祭に「叙聖」（按手）されました。

日本人初の司祭です。新島が按手された翌年ですから、日本人としてはこれは早いですね。以後、沢辺は東北地方を中軸に伝道に励み、晩年は東京に拠点を移しました。

というわけで、帰国後の新島は沢辺とは同じ宗教者なんですから、狭いキリスト教世界でのこと、会おうと思えば会う機会は幾度もあったと思われます。

特に新島が仙台に同志社分校（東華学校）を創り、東北伝道の拠点を据えようとした前後は、同じキリスト教世界の伝道者として仙台で交際が復活してもおかしくはありません。

とりわけ、沢辺の支援は「骨二徹シ忘ルヘカラス」とまでかつては深謝していたのですから、「恩知らず」と言われても仕方ありません。

ニコライへの敵意

両者が疎遠だった要因は、おそらく新島の方が敬遠したからではなかったか。新島は正教会を邪教視していた感があります。そのことは、ニコライへの評価が低いことから窺えます。

ニコライが沢辺に洗礼を授けた一件（新島にはこの件はおそらく伝わってはいません）後のことですが、新島は岩倉使節団の用務でロンドン滞在中にアメリカン・ボードのモデルとなったミッション（London Missionary Society）をわざわざ訪ね、あるお願いをしております。新島は会見の様子を、アメリカン・ボードの幹部（いわば理事長）であり、新島の「アメリカの父」であるA・ハーディーに次のように報じています。

「私は〔ミッション幹部の〕マレンズ博士に向かって、函館に複数（a few）の宣教師を派遣してもらいたいと熱烈に懇請（a loudest Macedonian cry）いたしました。同地にはプロテスタントの宣教師は皆無で、ただひとりロシア正教の司祭がいるだけです。私は同港から逃亡する直前には彼に日本語を教えていました」（㉔113、原文は英語、私訳）。

恩人でもあるニコライ潰しとも取られかねない直訴です。ニコライ一人では少ないからもっと宣教師を、というよりも、「本当の」宣教師を派遣する必要がありますよ！との願いと思われるます。かつて世話になったニコライに新島が帰国後は一度も面会しようとしなかったのも、同じ理由からと思われます。

ニコライは東京神田に転出していましたから、会うことは簡単でした。せめては挨拶だけでもすべきじゃなかったでしょうか。一方のニコライの方は、帰国した新島の動向を日記でちゃんと追ってますから。ここでも新島は多少「恩知らず」ですね。

その延長線とも考えられる対処法が、同志社の東北進出でも表明されています。校長になった自分の代理（副校長）として同志社仙台分校へ送りこもうとしていた市原盛宏（もりひろ）（同志社教員）に対して、新島は仙台進出要因のひとつに正教会対策を挙げています。

なんと「仙台で実に強固な根を蔓延（はびこ）らせている正教会（Greek Church）を叩き潰せ（Crush down）」という命令文（原文は英語）です（㉔214）。「抹消せよ」と言わんばかり

の、新島牧師としては稀に見る激烈な表現です。よほど腹に据えかねていたのでしょうか。

客観的に見て、同志社以前に仙台地方に進出したプロテスタントは、先発した正教会による開拓伝道の成果をうまく利用したり継承したりしております。たとえば、同地における初期のプロテスタント信徒の多くは、正教会から移っております。

このようにプロテスタントが正教会による伝道の恩恵を受けているのは確かなのですが、新島としては鎮圧、いや壊滅すべき対象だったのでしょうか。沢辺にとっては哀しいことですが、「昨日の恩人は、今日の敵」になりました。

新島が所属した教派

こうしたことから分かることは、新島にとって自分を育ててくれた教派は、何にもまして優れたキリスト教（プロテスタント）でした。教派の名前はCongregationalismです。日本語では、当初は会衆派と訳されましたが、その後は改称されて組合教会と名乗ります。

彼がアメリカでたまたま接触した教派がこれでした。身元引受人となってくれたA・ハーディーが、ボストン屈指の名士、実業家（資産家）であるうえに、篤実な会衆派の信徒だったからです。

彼の庇護（ひご）を受けて入学した3つの学校は、いずれも会衆派系の学校で、ハーディーが理事を務めていました。だから、洗礼を受けたのも会衆派の教会ですし、もちろん神学校もそうです。実は会衆派の信徒になったのも、日本人としては新島が第1号でした。

受洗したのは高校在学中の1866年12月30日のことで、場所はアンドーヴァー神学校教会でした。その後、大学と大学院に学び、按手礼を受けて会衆派牧師になります。

帰国する際、新島は会衆派系のミッション（アメリカン・ボード）から宣教師に指名されます。ハーディー自身がこのミッションの指導者でしたから、「息子」を特別扱いすることに尽力してくれました。

つまり、新島は22歳で留学生となってから、アメリカで日本人初の会衆派の信徒、ついで日本人牧師第1号となり、最後は幸運にも宣教師に取り立てられた、というわけです。

日本に戻ってから大磯で亡くなるまでの新島の後半生（1874年～1890年）は一貫して会衆派の牧師（宣教師）と教育者の二刀流の生き方が貫徹されます。

会衆派は、アメリカの諸教派の中でも、自由主義が最も顕著な教派のひとつです。新島はその基本的な性格を「自治教会」と捉えます。つまりは、「自由教育、自治教会、両者併行、国家萬歳」が彼の「畢生（ひっせい）のモットー」になります。

しかし、彼はこのモットーの前半を時には「自由教育、自由教会」とも言い換えておりますから、「自由」と「自治」は新島にとってはほとんど同義語です。つまりは、やはり「自由命」なんです。

3つの日本記録と教派

こうして見ますと、今まで述べて来た3つ（会衆派信徒第1号を含めると4つ）のタイトル・ホルダーとしての新島の背景や基盤には、会衆派という共通項が存在したことが分かってきます。会衆派という視角から新島（さらには同志社）を分析すると、彼（や同志社）の基本的な性格なり特徴がよく掴（つか）めるというものです。

二刀流であるという視点から見ますと、彼は学園（同志社）だけでなく、教会（同志社教会）をほぼ同時に立ち上げ、「自由教育、自治教会」を「両者併行」させようとした。すべては、自由のためです。しかし、創立から150年近くが経（た）ちますと、学園同志社の巨大化に比べた場合、同志社教会の存在の希薄さが目立っています。

私は新島が初代牧師を務めた同志社教会で学生時代に洗礼を受け、今は責任役員をしておりますが、学内では「同志社教会ってどこにあるんですか」状態です。答えは今出川キャンパスです。女子中高・女子大から日曜の午前中だけ栄光館（ファウラー・チャペル）を借りて密やかに礼拝を行なっています。

「両者併行」ですから、私学としての同志社は、官立（今の国公立）学校では取り組めない宗教的教育（精神的教育）の実践に励めます。学校でも教会と同じ教育的効果をあげるためです。

私学人であり宗教家でもあった新島は、学校でも「心育」（徳育）や「魂の教育」（education of Soul）を行なおうと努力しました。そのために、同志社は最初からキリスト教主義（会衆主義）に立つ学園として開校されました。今も同志社の寄付行為（学園憲法）には「キリスト教主義に基づく徳育」と明記されている所以（ゆえん）です。

会衆派の特色

というわけで、新島・同志社（学園ならびに同志社教会）と会衆派は切っても切れない関係にあります。会衆派の特徴について詳しくは神学部の特講に任せるとして、今日は結論めいたものだけを掻（か）い摘（つま）んでお話しします。

最大の特質は、自由主義です。教会（学校）の運営は、権力、権威、規則（法令）などで人を縛らず、自己規制（良心に縛られた自由）に委ねます。聖句で言うと、「真理【であるイエス・キリスト】は汝らに自由を与える」（ヨハネによる福音書8章32節）が原則です。

同志社はこの文言を戦後早々（70年前の1952年）にラテン語（Veritas Liberabit Vos.）で明徳館正面上部の壁面に飾っています。新制大学となった学園の新たなモットーにしたかったのでしょうか。ちなみに、羽仁（はに）五郎氏の献策により、国立国会図書館カウンター上部にも同文（ただしギリシャ語）が刻まれています。

会衆派の2番目の特色は（自由主義と一体化されていますが）民主主義です。物事の決め方がトップダウン（上意下達（かたつ）、支配服従）ではなく、ボトムアップ（主権在民）です。つまり、主権は法王、監督、聖職者（司祭、牧師）、教会役員ではなく、あくまでも組織の構成員、つまりcongregation（会衆）にあります。要は、タテ社会ではなく、平等・民主的なヨコ社会が基本です。

ここから人格主義（人権尊重）、平民主義（無差別）が大事な原則となって、尊重されます。人間関係がフラットで水平ですから、平等感覚が極めて顕著です。

会衆派と教育

最後に強調したい特徴は、会衆派は伝統的に教育活動に重きを置く教派だということです。1620年、時のイングランド国王（イギリス国教会）から宗教的弾圧を受けたピューリタンたち（清教徒）が、メイフラワー号に乗って、宗教的「自由」を求めて新大陸（北米）の未開拓地に渡ったのが、始まりです。世に言う「ピリグリム・ファーザーズ」の団です。

彼らは会衆派としてボストンを中心に宗教的に理想の「自由」な国土を新たに拓（ひら）こうとしました。こうして今のニューイングランド地方は、伝統的にピューリタンの伝統が根強い地域になります。函館を出た新島が辿り着いたのは、奇しくもその中核都市であったボストンでした。

ピリグリム・ファーザーズ、さらにはその後裔（こうえい）たちは新島のかたわら、いち早く教会と学校（牧師養成学校）を建てます。移住直後の1638年に創立した学校が今のハーバード大学（H）ですが、アメリカで最古の大学になります。もちろん新島もこの事実を知って、こう強調します。

「米国の如（ごと）きは清教徒が寂寞（せきばく）人なく、風吼（ほ）へ、濤（なみ）怒る、大西洋の海岸【プリマス】に移住してより十五年を出でざるに、早やハーワルド大学の基をを開けり。〔中略〕思ふに米国人が自治の元気に富むも、豈（あ）に此（こ）の大学の如き者、関りて力なしとせんや」（①137、傍点は本井）。

アメリカ人の「自治の元氣」の源泉は実にハーヴァードにあり、と言わんばかりです。新島はこの文言を「独立自治ノ元氣」とも言い換えております（①125）。木村毅が新島を日本人「初の自由独立人」と位置づけた背景には、新島自身がピューリタンの後裔（こうえい）であったとの認識を踏まえていたと見ることができます。

ピューリタンたちは、ハーバードに続いてイエール大学（Y）をも設立します。毎年実施されるアメリカの総合大学（University）部門のランキングでは、上位三位はHYP（ヒップ）と呼ばれる3つの大学が独占するのが普通です。HとYは会衆派で、Pはプリンストン（長老派）です。

この点は、カレッジ（リベラル・アーツ・カレッジ）部門のランキングでも同じ傾向として表れます。トップを占めるのは、アーモストかウィリアムズかのどちらかです。これまたいずれも会衆派です。奇しくも新島が入学できた大学が、いかに名門であるかが、分かります。

このように会衆派は、教会だけでなく大学の創立、つまりは青年の教育に早くから意欲的でした。アメリカの学校は「自由の精神」を養い、国家の基礎を強固にしようとしませんが、とりわけキリスト教主義の私立大学は、「自由の護（まも）り手」でもありました（⑩258参照）。

こうした伝統に沿って、アメリカン・ボードの宣教師たち（新島も含めて）は日本でも学校（それも自由な学校）の設立に努力を傾注いたしました。関西を拠点としたこのミッションは、京阪神にそれぞれ女学校（神戸女学院、梅花女学校、同志社女学校）をもちいち早く開校しました。新島はさらに日本初の私立大学まで創ろうとして、男子校を京都に設置したというわけでした。

歩く会衆主義

新島がニューイングランド特有の会衆主義の影響をいかに濃密に受けていたかが、お分かりいただけたと思います。彼こそ、「歩く会衆主義」、あるいは「見える会衆主義」と呼んでもおかしくありません。だから教会はもちろん、同志社の内部もすぐれて会衆主義的です。学校の運営やスタッフ・学生の対応はもちろん、校風がそもそも会衆派色濃厚なんです。

たとえば、人間関係が相互にフラット（民主的）で、温かいのです。学生たちが呼び捨てにする用務員に対して、いつも「五平さん」と親しく呼んだのは新島です。

彼は逆に学生に対しては、「新島先生と呼ばずに新島さんと呼んでほしい」と全校集会で泣いて頼む校長でした。新島の目線はまさに「一視同仁」（無差別）で、一人ひとりの尊厳を最大限に尊重いたします。「諸君、人ひとりは大切なり」（新島）の言葉通りです。

「ひとり」の中でも、とりわけ弱者や失敗者（聖書で言う「迷える羊」）が気になる「羊飼い」、それが新島です。「クラスで一番できない生徒に目をかけたい」（⑦330、原文は英語、私訳）とか、英文ノート（私訳）には「金持であろうが貧乏であろうが、学問であろうがなかろうが、人は神の御姿（みすがた）に似せて作られた〔被造物である〕」（本井康博著『千里の志—新島襄を語る（一）—』 思文閣出版 2005年 143頁参照）とも記しております。他人も自分も会衆としては同列なんです。

新島にとって生徒、学生は、自分と同じように神の「被造物」ですから、その尊厳は最大級に重視しなければなりません。それがもっともよく表われたのが、新島の遺言です。スタッフに対して「いやしくも教職員は学生を丁寧に扱うこと」を言い残して亡くなっております。新島ほど学生を尊重し、人格教育に徹した教育者は世に稀です。

要するに新島には、会衆派の原則がどこまでも身についていて、それを実践いたしました。重ねて言えば、会衆派の教会では牧師や役員ではなく構成員である一般会員（congregation）が主権を保有していますから、学校でも校長や理事が組織を牛耳（ぎゅうじ）るのではなく、教職員や生徒、学生一人ひとりが主役でした。

自由な校風

会衆派の感化は以上述べただけではありません。私が一番強調したいのは、やはり自由主義です。自由命の新島を生み出したのは会衆派ですから。そして会衆派と新島その人の両者が相俟（あいま）って、同志社の自由な校風を作りあげていることは、もはや言うまでもないと思います。

こうした「同志社学風」が新島の教え子たちにより早稲田に「輸血」されたと感謝するのが、冒頭で紹介した『早稲田外史』でした。同書には、同志社から導入されたのは「いくぶんかニューヨークランドの清教徒（ピューリタン）的気風」だともあります（『元祖リベラリスト』55頁）。新島流に言えば、同志社もまたハーバードのような「自治の元氣」の源泉でした。

5人の移籍組は、すべて会衆派信徒（うち3人は新島牧師から受洗）、しかも4人までもが北米留学者ですから、いわば「小新島」みたいな自治自由の精神に満たされた会衆主義者です。早稲田の佐藤能丸（よしまる）先生も同じくこの点に着目され、新島の門弟たちが早稲田に持ち込んだのは「同志社系自由主義の風」だと指摘されています（同前、56頁）。日本人「初の独立自由人」と称えられた新島の教え子だけのことはあります。いずれにせよ、彼らの働きは自由あつての同志社が面目躍如とする挿話ですね。

学内の反応も同じです。同志社大学はある年、学生アンケートで、「同志社の良い点、不満な点」を尋ねたことがあります。両方の間で奇しくもトップを占めたのが同じ答え、すなわち「自由」であったのは、いかにも同志社らしいですね。自由だから好き、いや、自由過ぎるのが嫌い、というわけです。良くも悪くも自由な学園です。

「我が大学の空気は自由なり 新島襄」

最後に私の好きな新島の言葉をひとつ。「我が大学の空気は自由なり 新島襄」（「同志社大学設立の大意」）です。「空気」は「学風」とか「校風」に置き換えられます。

同志社のキャンパスを満たす空気、あるいは学園に流れる風は、どこまでも「自由」なんです。同志社スピリットの最大要素も、やはり自由主義と言ってもよからうと思います。

新島は私的にはFreedom is my living motto.を、そして同志社的には「我が大学の空気は自由なり」をモットーとしていたと考えられます。そこでこれを「売り」にしたいなあとは私はひそかに目論んでいます。どうすればよいのか。

新町キャンパスに入ってすぐの正面（渡り廊下壁面）に彫られた「諸君ヨ、一人ハ大切ナリ 新島襄」の文言（掲示）は大ヒットで、おかげで新島のこの言葉はかなり有名になりました。私もあの時、候補としてアーモスト大学のモットーを提案してみたのですが、落ちました。「ラテン語なんか誰が読めるかいな」との反応でしたから。

ならば、リベンジとして2匹目のドジョウを狙うには、日本語、それも新島センセイの言葉に限る、と反省して先の言葉「自由は・・・」に狙いを絞りました。掲げる場所としては、学内と学内の境目（さかいめ）スレスレを狙っています。

近く始まる創立150周年記念事業として新築が計画されている新図書館です。その壁面に飾れないものか、とひそかに期待しております。

場所的にも鳥丸（からすま）今出川の交差点（地下鉄今出川駅上）からよく見えますから、同志社スピリットを学外の人たちの目にも「拡散」させるには最適のロケーションになりそう、と夢は広がります。これまで新校舎や施設の名前を十以上、命名する機会があった私にとって、おそらくこれが最後の機会になるかも、と思われまふ。

それだけに、「我が大学の空気は自由なり」の「見える化」は「新島襄の語り部」として、なんとか実現させたいものです。

2021年6月9日 同志社スピリット・ウィーク春学期
オンラインによる「講演」記録